

処理を考える(20)

地鶏の「ジ」は地面の「ジ」!?

最近の旅行先での話です。

「ジドリ(地鶏)のジはどんな意味からきているのかな」との話題になり、誰かが「ジドリのジは地面で飼っているからジドリというんだ」と自信ありげに答えるので一同納得した。地鶏は「地面」で飼うが、養鶏場の鶏は金網の上で飼っているのだから、誰も疑うものはいませんでした。

「そうすると同じ「地」でも「地酒」の「ジ」とは違った意味の使われ方をしているのか」ということになり、「もし、音声訳で「ジ」を補足する必要があったとしたら「ジザケ」の場合は「ジモトのジ」とか「チホウのチ」となるけど、地鶏の地の場合はやはり「ジメンのジ」とやる方が補足としては適切になるかな」ということになり、「これは漢字を補足する場合、よく考えなくてはならないというよい例になりそうだ」ということになりました。

職場でこの話が話題になり、本当に正しいのかどうか辞書で調べる、『大辞林』には「地鶏=日本各地で古くから飼われているニワトリ」とあります。「地面で飼われているから・・・」といった話はどこにもありません。これでは地酒の地という意味と同じになり、それまでの結論とまったく反対の結果になりました。

そこで、こんどは「漢字を補足する必要がある時は、必ず辞書に当たり、自分の補足する言葉が違った意味に取られないかよく吟味する必要がある」ということの教訓になったわけです。

聞き手はあくまでも補足された言葉の意味で理解しますから、それこそ「地面の地」などとやっていたら、私たちの間違った解釈を読者にも押しつけることとなります。

漢字を補足しなくてはならない時に「字さえあっていたらいい」という考えで処理をしていると気が付かずにこうした間違いを起こすことにもなりますのでくれぐれも注意しましょう。

## 今月の練習問題

### 『減り始めた化学肥料の使用量』

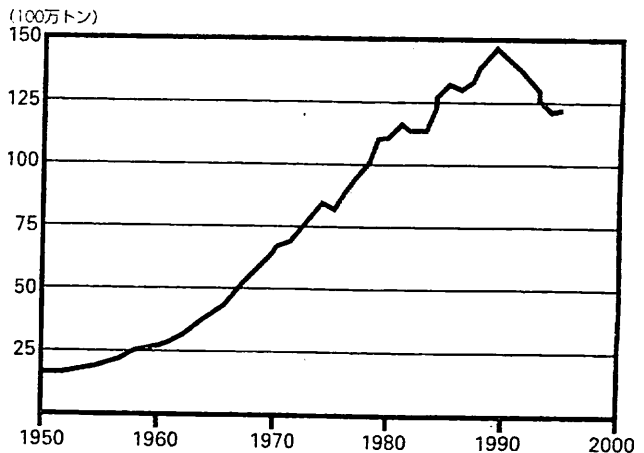
1950年から90年まで単収を劇的に上げた国々はすべて、化学肥料に敏感に反応する多収量品種の導入と化学肥料の使用量の劇的な増大という組み合わせによってそれを実現した。中国、インド、米国などのいくつかの国々では、灌漑面積も大幅に拡大した。第1章で述べたとおり、1950年から89年まで、世界の農民は、化学肥料の使用量を1400万トンから1億4600万トンまで増やした。10倍という驚くべき伸びである。この時期、世界の化学肥料の使用量の伸びは、世界の経済動向のなかでもっとも予測しやすいものの一つだった。

1989年以後、世界の化学肥料の使用量は減り始めた。これはおもに、旧ソ連で88年に始まった農業革命のためである(図6・2参照)。化学肥料の価格を世界の市場価格に合わせるという同国の政策が、農民たちの支払う肥料価格を高騰させ、使用量の急激な低下を招いた。それ以来毎年、旧ソ連の化学肥料の使用量は減ってきている。95年には89年のレベルの五分の一以下になっている。

北アメリカや西ヨーロッパ、日本などの農業技術の進んだ他の国々では、化学肥料の使用量は1980年代に横ばい状態に入りつつあった。米国の場合、90年代半ばの化学肥料の使用量は、80年代初頭よりも減っているのである。他の農業先進国の農民たちと同じく、米国の農民も、ある量を過ぎると、それ以上いくら化学肥料を増やしても穀物の単収はほとんど増加しなくなることに気づいたのである。この認識と、土壌によって異なる化学肥料要求量に関する詳細な検査方式の採用とが合わさって、作物の必要に細かく対応したかたちで化学肥料が使われるようになった。

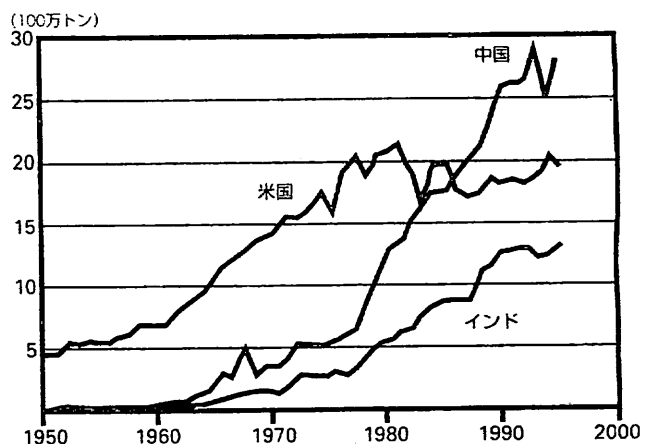
一部の発展途上国においてさえ、化学肥料の使用量の伸びは鈍化している。たとえば中国では、現在2800万トンの化学肥料を使っているが(米国では2,

図6-2 世界の化学肥料使用量, 1950-95年



出所: 巻末の注 8 に記載

図6-3 中国, 米国, インドの化学肥料使用量, 1950-95年



出所: 巻末の注 10 に記載

000万トン)、化学肥料の使用量を現在のレベルより大きく伸ばしたとしても、その経済性はあまり期待できるものではないと思われる。実際、中国における化学肥料の使用量は90年代末には下がるかもしれない。80年代初頭に米国で起きたような事態の出現である(図6・3参照)。

インドやバングラデシュ、パキスタンなどの多くの発展途上国では化学肥料の使用量は、ゆっくりとではあるが増え続けている。インドの現在の使用量は、米国より約500万トン少ない年間41400万トンである。

## 先月の練習問題の処理例

『お言葉ですが・・・』高島俊男著

今回は、お二人に検討して頂きました。他にもいろいろな処理があるかと思えます。意見などございましたら係りまでお寄せ下さい。

### こうづけさん<コウツケハはツに濁点>、こうづけさんお久しぶり

いつも悪口ばかり言っているから、たまにはうれしい御報告をいたしましょう。

毎週日曜の産経新聞、「晩年の生きよう」というコラムがある。歴史上の著名人物の晩年を書いたもので、筆者は編集委員の牧野弘道さん。

その「新井白石」の条にこうあった。

白石の先祖は元々は上野国<コウツケのクニ、コウツケにルビ、ツはツに濁点>、群馬県の源氏の武士で、戦国の世を流れ流れて祖父の代には常陸国(茨城県)下妻に移り住んだ。

うれしいのは、この「こうづけ」というふりがななんだ。

お久しぶり、「こうづけ」さん!

というのが、いま日本では、新聞も雑誌も本も、すべて「上野」のかな書きは「こうづけ」<ズはスに濁点>なのである。たとえば、「吉良上野介」は「きらこうづけのすけ」<ズはスに濁点>。

これは、国語辞典がみなそうしているからである。

でもねえ、「下野」が「つけ」で、「上野」が「ずけ」<ズに濁点>とは変だなあと、誰も思わないのかしら。だいたい「ずけ」なんて、見るからにきたないじゃないか。

……と思っていたら、牧野さんがあえて、あらゆる国語辞典に異を立てて「こうづけ」<ツに濁点>と書いてくださった。

牧野弘道さんに、敬礼!

ずっとずっと昔、いまの群馬・栃木両県一帯を「毛野」と言った。「草木の生い上げる野」の意味であろう。――ほかに、「むしろを作る野」とする説、「皇室に食物をたてまつる野」と考える説、などもありますが一――。

その後、この毛野を二国にわけて、京都に近いほうを「上毛野」<カミツツ・ケノ>、遠いほうを「下毛野」<シモツツ・ケノ>とした。

この「つ」は、「の」の意味である。つまり、「上の毛野」と「下の毛野」だ。大化の改新のころ、国名は二文字、ということになったので、「毛」を除いて「上野」「下野」<カミノ、シモノ>と書くこととした。ただし読みは従来通りで「かみつけの」と「しもつけの」。

なお、「毛」は完全に消えうせたわけではない。いまでもJRに両毛<リョウモウ、リョウホウのリョウにケ、>両毛線がある。また群馬県には上毛<ジョウモウ、ジョウウはウエ、モウはケ>上毛新聞という新聞があるよし。

もともどもどって――

そのうちにだんだん、「かみつけの」「しもつけの」のおしまいの「の」が発音されなくなって、「かみつけ」「しもつけ」と言われるようになった。

さらに、「かみ」がなまって「こう」になった。これは、たとえば「神々しい」<カミガミしい>を「こうごうしい」と言うのと同じ発音変化ですね。

「こう」になると、その下は濁るほうがなめらかだから「こうづけ」になった、――という諸段階をへて、現在、「上野」<カミノ>と書いて「こうづけ」、「下野」<シモノ>と書いて「しもつけ」、ということになっているのである。

すべての国語辞典が「こうずけ」<スに濁点>と書くのは、現に「ず」と発音しているんだから「ず」でよい、という考えなのであろうが、それは乱暴というものだ。ならば「三日月」は「みかずき」<スに濁点>に、「千羽鶴」は「せんばずる」<スに濁点>になってしまう。

それに、「こうづけ」<ツに濁点>だから、またもとの「かみつけの」へたぐってゆく手がかりがあるのである。「こうずけ」<スに濁点>では何のことかわからない。

よく新聞のコラムなどで、『広辞苑』にこうある、と鬼の首をとったように書いている人があるが、あれは滑稽ですね。『広辞苑』に書いてあることは全部正しい、と思いきむのは、妄信というものである。

・・・略・・・

たとえば「正論」欄の「円と日本文化の深い関わり」と題する暖村明さんの文章には、「中心には釋迦が鎮座し」「また禪においても」などの文字があった。<シャカのシャクとチンザのチン、ゼンはいずれも旧字体>ほかの新聞なら、問題なく「釈迦が鎮座し」「禪においても」に変えてしまうところだ。

それが、外部の寄稿者のみならず、内部の者であっても、署名して発表する文章のばあいはその表現を尊重するようになっているのか。それとも、牧野さんはこの、すべての国語辞典が認めない「こうづけ」を通すために、校閲部相手に大闘争をやったのだろうか。

ちょっとうかがってみたい気がします。

二通りの読みがあって意味が異なるもの (49)

悪気	ワガ <sup>ク</sup> 人に害を与えようとする気持ち アツキ 悪いにおいの空気	熱湯	ネツウ 煮え立っている熱い湯 アツユ 熱めの湯
足取り	アツリ 相撲の決まり手の一つ アト <sup>リ</sup> 犯人の逃げて行った経路	大物	オモト <sup>ノ</sup> 誰からも一目置かれている者 ダイモツ 木材や石材などの大きなもの
目張	マ <sup>リ</sup> 物の隙間に紙などを張りふさぐこと メ <sup>バ</sup> 目の縁が引きつっていること。またその人。	生木	ナマキ 地に生えている樹木 カラキ 乾ききらない木 カ <sup>キ</sup> 果実のみのる木

『言葉に關する問答集』文化庁編より

「不治」は「フジ」か「フチ」か

(答) 「(病気が) なおらないこと」というほどの意味の語「不治」を、フジと言うかフチと言うかの問題である。フジは歴史的仮名遣いでは「ふぢ」である。国語辞典等についてみると、まず『日葡辞書』には、Fugi no yamai とあり、フジ(ふぢ)である。『和英語林集成』には、初版から第三版に至るまでは、見出し語に採録していない。『言海』『日本大辞書』ではフチであり「フジ」(ふぢ)は見出し語として掲げてないが、『ことばの泉』『大辞典』『修訂大日本語辞典』では、フチがなくフジ(ふぢ)だけを掲げている。『言泉』『辞林広辞林』『広辞林(新訂版)』はフチであり、フジ(ふぢ)がなく、『新版広辞林』以後にフジを参照項目として掲げるようになった。また、『辞苑』『広辞苑』もフチだけであるが、『広辞苑第二版』には、フジ・フチともに

本項目として掲げている。

その他のいわゆる小型辞典を含む諸辞典では戦前から戦後数年の期間に刊行されたものには、フチだけのものが多いが、その後は、フチの頁にフジの形を掲げ、かつ、フジを参照項目としているものが多くなってきた。そして昭和四十年代に入ると、フジ・フチともに本項目として取り扱う辞典が多くなり、ごく新しいものには、フジを参照項目としているものもみられる。

結局、現在では、「フジ」「フチ」ともに行われており、そのどちらを誤りと言うことはできないであろう。

NHKでは、不治について、フジ・フチの両様を認めているが、フチを標準の形としている。

なお、「ジ」は「治」の呉音、「チ」は漢音である。ただし、「ジ」と「チ」とによって意味の違いはない。呉音の「ジ」は、歴史的仮名遣いでは「ぢ」と書くが、「現代かなづかい」では、その細則第三の「た

ゝし」書き（①二語の連合によって生じたぢ・づ、②同音の連呼によって生じたぢ・づ）に相当するものではないので、「ぢ」は誤りであり、細則第三に従って「じ」と書き表すべきである。「常用漢字表」の音訓欄にも、音として「ジ・チ」と掲げている。したがって、「不治」を「フチ」ではなく、フジと読む場合は、「ふち」が二語の連合、又は、同音の連呼によって「フジ」になったのではないから、「ふじ」と書くのが現代かなづかいによる正しい書き表し方である。

### 「重複」は「チョウフク」か「ジュウフク」か

（答）「重複」は、「チョウフク」と読むか「ジュウフク」と読むかという問題である。辞書によれば、明治十九年刊の『和英語林集成（第三版）』から、明治三十一年刊の『ことばの泉』までは、チョウフクは採録しているが、この頃にジュウフク（旧仮名遣い、ぢゅうふく）の語形を掲げず、ジュウフクの見出しもない。『ことばの泉補遺』になってジュウフクを見出しとして掲げ、<「ちょうふく」の誤読。>としている。明治四十四年に改訂した『辞林』では、ジュウフクを参照見出しとし、<「ちょうふく」に同じ。>としている。以後は、ほとんどのものが、チョウフクを本項目とし、ジュウフクの形をも掲げ、ジュウフクを参照見出しとしている。ただ、昭和二年刊の『日用語大辞典』でも、両形を本項目としている。戦後のものでも比較的新しいものの中には、両形を本項目としているものもある。

以上のような事実から判断すると、本来の伝統的な言い方としてはチョウフクであるが、明治の末、大正の初めごろから口語としてはジュウフクがかなり行われていたと見ることができよう。

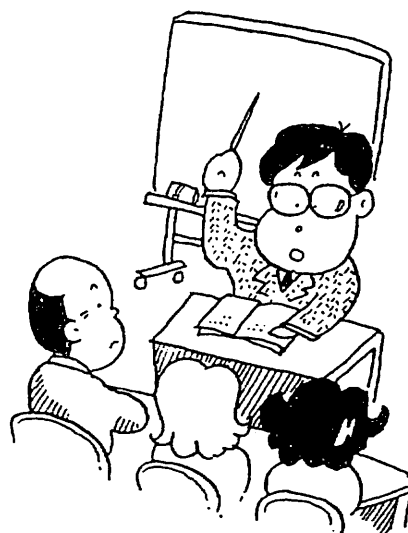
「重」は、漢音がチョウで、慣用音がジュウである。「重」を含む漢字二字から成る熟語では、どちらかと言えばジュウと読

むものが多いようである。そして、これには、現代でも日常語としてしばしば使われている語が多い。例えば、「重圧・重囲・重視・重症・重職・重心・重税・重体・重鎮・重砲・重役・重量」、や「重婚・重層・重殺・重箱・重犯・重訳」などである。チョウと読むものには「重畳・重陽」や「慎重・丁重」などがあるが、右の語に比べて日常語からは少し離れているようである。ジュウともチョウとも読むものには「重出・重臣・重祚・重任・重用・重来」などがあるが、これらは、現代語としては、ジュウの方が優勢である。そして、「ジュウ」と「チョウ」とで、意味の区別があるとは言えない。

以上のようなことから、チョウフクは、伝統的な言い方、ジュウフクは、比較的新しい言い方ということができよう。NHKではチョウフクを採っている。

なお、「重宝」とか「自重」とかのようには、チョウと読むかジュウと読むかで、意味を異にする語もある。例えば、「重宝な品物・重宝がられる」と「伝家の重宝（注）」、「自重してください」と、「自重ートン」などのようである。

（注）この意味の場合にも、古くは「チョウホウ」と言った。



## ミニディスクが急速に普及

オープンテープからカセットテープに変わってから20年くらいたったのでしょうか。カセットテープに変わってから録音図書の利用は飛躍的に増えました。オープンテープはA面からB面に掛け替える作業だけでも大変でした。それがカセットテープになって操作が簡単になり、またテープレコーダーが小さくなったことでどこでも聞くことができるようになりました。コピーも簡単で複製がいくらかでもできるようになりました。それに比べて点訳書は1冊しかなく複製は大変コストがかかっていました。それが今では、点字はパソコン入力为主力になり、「てんやく広場」にアップされている点訳されたデータは全国どこからでもパソコン通信を使って瞬時に利用できるようになり、録音と立場が逆転しています。



録音図書もいずれ通信を使った利用が可能になるデジタル録音になっていくことは時間の問題となってきています。最近、急速にミニディスクが普及しているようですが、いずれこれがカセットテープにとってかわるのではないかと考えられます。

実際、ミニディスクはつい最近まで1台が3、4万円していましたが、ディスカウントショップなどでは「再生専用機」で1万円台、録音が可能なものでも2万円台まで下がってきています。ディスクも1枚400円前後まで下がっています。1枚のディスクに最高144分（モノラル）録音が可能ですが、コストの面ではまだ少しカセットテープの方が安いようです。しかし、いずれ数年のうちにカセットテープそのものがなくなる時代がきそそうです。

将来、録音機がミニディスクなどのデジタル録音になったとしても「上手に録音する為の技術」といったものが変わることはありません。もちろん録音機の操作法などは少々変わってきますが……。しかし、デジタル録音になることで、これまで不可能であった、録音した後から挿入したり削除したりといったことがいとも簡単にできるようになります。これまで以上に録音図書作りが楽しくなるでしょう。また、カセットテープではできなかった瞬時に飛んだり戻ったりするといったことも簡単にできますので、録音図書の作り方自体もいろいろ工夫することができます。利用者の使い勝手を考えた録音図書がいろいろ製作できるようになりますので、編集者の仕事も大変やりがいが出てきそそうです。

## 利用者から製作依頼を受けている原本

以下のリストは、読者から音声訳の依頼を受けている本です。引き受けて頂ける方がありましたらご連絡ください。初めてのグループの方は何か5分でも結構ですから録音したものをご持参下さい。録音状態をチェックさせていただいてから録音にかかっています。

### 書名 <分類>

- 『入門Windows95』（入門コース）  
『ディスカバリー世界の実相への接近』<宗教> B5版 308頁  
『鷺の驕り』服部真澄著<小説> B5版 436頁  
『エヴァン・スコットの戦争』ミッチェル・スミス著<小説> 文庫 622頁  
『ラスト・コヨーテ』上・下 マイクル・コナリー著<小説> 文庫 650頁  
『あした天気にしておくれ』岡島二人著<小説> 文庫 370頁  
『意中の歌人たち』石野勝美著 <詩歌> B5版 225頁  
『いのちの輝き』ハート・C・フルフォード、ジーン・ストーン著 <医学> B5版 230頁  
『家族シネマ』柳美理著 <小説> B5版 158頁  
『空海の靈言』善川三朗著<宗教> B6版 218頁  
『キリストの靈言』善川三朗著<宗教> B6版 220頁  
『ソクラテスの靈言』善川三朗著<宗教> B6版 260頁  
『坂本龍馬の靈驗』善川三朗著<宗教> B6版 266頁  
『現代の聖餐論』神田健次著<宗教> B5版 360頁  
『目で見るリハビリテーション医学』 <医学> A4版110頁  
『スウェーデンの経済 福祉国家の政治経済学』<社会科学> B5版 182頁  
『キリスト教の弁証』<宗教> B4版 200頁  
『地球への求愛』 <自然科学> B4版188頁  
『エコシステム農法の奇跡 微生物が日本の大地を救う』<農業> B4版 210頁  
『気で治る本 日本の[気の医療]最前線』<医学> B4版 248頁  
『ヨセフとその兄弟 II』 <宗教> B4版 620頁  
『ヨセフとその兄弟 III』 <宗教> B4版 562頁